慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	第六回パン・アフリカ会議の概要と二エレレ大統領の開会演説
Sub Title	The sixth Pan-African Congress : a brief survey and President Nyerere's opening speech
Author	小田, 英郎(Oda, Hideo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1975
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.48, No.7 (1975. 7) ,p.97- 113
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19750715-0097

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資料

第六回パン・アフリカ会議の概要とニエレレ大統領の開会演説

小田英郎

はしがき
一、第六回パン・アフリカ会議の概要
二、第六回パン・アフリカ会議におけるニエレレ大統領の開会演説

はしがき

一九七四年六月十九日から同月二十七日にかけて、タンザニアの首都ダレスサラームで第六回パン・アフリカ会議が開催された。第五回パン・アフリカ会議の開かれたのが一九四五年十月（英国・マンチェスター）であるから、実に二九年振りにパン・アフリカ会議が復活したわけである。そのうえ、過去のパン・アフリカ会議がいずれもロンドン、パリ、ブリュッセル、リスボン、ニューヨーク、マンチェスターと欧米の都市を舞台としていたのに対して、この第六回パン・アフリカ会議は、初めてアフリカで開催されたパン・アフリカ会議であるという点で、たしかに画期的なものであつた。

しかし日本では、この会議はあまり注目をひかず、たとえば最近比較的アフリカ関係の記事を多く載せるようになつた日本の新聞も、この第六回パン・アフリカ会議については、短い外電を掲載するというかたちで簡単に処理したにとどまつた。[1] その後『月刊アフリカ』誌が三ページほどの紹介記事を載せたが、[2] 筆者の知るかぎりでは、これを例外として、日本では第六回パン・アフリカ会議はほとんど無視されてしまつたといえる。しかし考えてみれば、最近のアフリカでは、一九七四年二月に始まる長いエチオピア革命と帝制の廃止、同年四月に起つた本国のクーデターとそれを直接の契機とするポルトガル植民地体制の崩壊、それによつて拍車をかけられたローデシア少数白人政権の弱体化や、同じ方向に動きだした南ア問題等、大きな変動がいくつも起つており、したがつて一九六〇年代なかば以降水々しさを喪失したかに見えるパン・アフリカニズム運動が、前述のような大変動のかげにかくれて注目をひかなかつたのも、あながち不思議ではないであろう。

ただ、これまでパン・アフリカニズム運動史に関心をいだき続けてきた筆者にとつては、第六回パン・アフリカ会議が二九年振りにそれもアフリカで開催されたという事実は、いろいろな意味で非常に興味ぶかいことである。たとえば、第六回と銘うつているからには、エンクルマがパン・アフリカニズム運動の指導権を事実上確立した一九四五年十月の第五回パン・アフリカ会議を名実ともに継承しようと当事者は意図したのであろうが、そうであるならば、エンクルマ主義者とはかならずしもいえないニエレレが二九年もたつてパン・アフリカ会議を復活したのはなぜか。またその場合、ニエレレは一九四五年以後のアフリカにおけるパン・アフリカニズム運動の発展をどう評価するのか。たとえば、エンクルマの手で開催され事実上の第六回パン・アフリカ会議と評された第一回独立アフリカ諸国会議（一九五八年四月十五～二十二日・アクラ）や、人民レベルのパン・アフリカ会議と目された第一回全アフリカ人民会議（一九五八年十二月五～十三日・アクラ）を、ニエレレはパン・アフリカニズム運動史のなかでどう評価しどう位置づけているのか、またその後一九六三年五月二十二～二十五日にアジス・アベバで開催されアフリカ統一機構を生みだしたアフリカ諸国首脳会議を、さらにはパン・アフリカニズムの具体的組織であるアフリカ統一機構そのものを、第六回パン・アフリカ会議がどう見たか、といつた問題もある。

また、この第六回パン・アフリカ会議が、最近合衆国で復活しつつあるパン・アフリカニズム的志向と、どういう関係にあるかといつた問題もある。合衆国では、一九三〇年代以降途絶えていたパン・アフリカニズム的志向が一九六〇年代後半におけるブラック・パワーの昂揚とともに徐々に復活し始め、一九七〇年九月三～七日にはジョージア州アトランタで「第一回現代パン・アフリカ会議」（Ist Modern Pan-African Congress）とも別称される「アフリカ系人民会議」（Congress of African Peoples）が開催され、黒人の解放とアフリカの解放とを同次元的に考えるべきことが改めて確認された。[3] 合衆国に復活しつつあるこのパン・アフリカニズム運動と、今度開かれた第六回パン・アフリカ会議との関係はいつたいどの程度のものか、その関係は将来どう発展するのか、といつた諸点をも含めて、解明すべき問題は多々ある。こうした諸問題を解明することによつて、この第六回パン・アフリカ会議がパン・アフリカニズム運動において新段階を画しうるものであつたかどうかという、より基本的な問題の核心に迫ることも可能になるであろう。とはいえ、こうした諸問題を解明するには、もちろんいまある材料の分析だけでは不十分である。そこで本稿では、まず第六回パン・アフリカ会議の概要を紹介し、ついでトゥーレの録音演説とともに第六回パン・アフリカ会議の討議資料として採択され、会議の方向づけに大きな役割をはたしたニエレレの開会演説を訳出することによつて、今後の研究の出発点をかたちづくることとしたい。

なお、ニエレレ大統領の開会演説は *Présence Africaine* No. 91 (Trimestre 1974), pp. 193～203 所収の英文から訳出した。[4] ちなみに、*Africa, Report* Vol. 20, No. 5 (September-october 1974), pp. 2-6 に、パン・アフリカニズムの歴史に触れた冒頭の部分をカット

したうえで「ドキュメント」として収録された同演説には、「黒人の統一と人間の自由」というタイトルがつけられている。

(1) 各紙が掲載した短い外電以外には、小田英郎「パン・アフリカニズムの新局面、世界のアフリカ人への復権か」(『読売新聞』昭和四九年十月十一日付夕刊、「リポート」欄)があるだけであろう。

(2) 「第六回パン・アフリカ会議の成果——アフリカ大陸で初めての会合——」・『月刊アフリカ』・一五巻一号(昭和五〇年一月)。

(3) この点については Imamu Amiri Baraka (edited With an Introduction by), *African Congress: A Documentary of the First Modern Pan-African Congress*, New York: William Morrow & Co., 1972, pp.vii~viii を参照されたい。

(4) 英文テキストには二カ所ほど部分的な欠落があるが、これらについては同誌に同時収録された仏文のテキストと照らし合せて補完作業をおこなった。

一、第六回パン・アフリカ会議の概要

第六回パン・アフリカ会議は、一九七四年六月十九~二十七日の九日間にわたつて、タンザニアの首都ダレスサラームにあるダレスサラーム大学のクワメ・エンクルマ会堂で開催された。参加者はアフリカ諸国、カリブ海諸国、合衆国、英国等三六ヵ国の代表約五〇〇名を数えた。[1] 会議は会長にタンザニアのニエレレ大統領を、議長には同国のアブード・ジュムベ副大統領を、書記長には合衆国の代表コートランド・コックスを選出し、ニエレレの開会演説をもつて討議の幕が切つて落された。ニエレレのこの演説は、前述のようにトゥーレの録音演説とともに討議資料として採択され、この会議の基調をなしたのであるが、その内容を見ると、アフリカ人、アフリカ系人の当面している問題や課題を、単にアフリカ問題や黒人問題として限定的にとらえるのではなくして、人間一般の問題としてこれを把握し、それを解決するために世界的規模の運動を形成、発展させようという、普遍主義的傾向が顕著にでていることがわかる。それはたとえば、「……この会議の目的は、あらゆる地域の人種主義、植民地主義、抑圧、搾取に反対する手段を討議し、さらにいつそう前進することである。われわれの討議は、過去および現在におけるわれわれ自身の経験に、特別の注意をはらいつつおこなわれるであろう。しかし同時にわれわれの討議は、人間の平等と民族自決を目指す世界的規模の運動の文脈のなかでおこなわれねばならない」という一節にも、はつきりと読みとることができる。

もつとも、このニエレレ演説を受けておこなわれた討議の詳細は、分らない。『プレザンス・アフリケーヌ』誌によれば、討議の主要なポイントは(a)植民地主義とくに南ア、ローデシア、およびポルトガル支配地域の植民地主義に対する闘争、(b)アフリカ大陸におけるあらゆるかたちの国際的帝国主義(新植民地主義、人種主義、外国の軍事基地、等々)に対する闘争、(c)合衆国、ヨーロッパ等における黒人少数者の闘争に対しての積極的支援、の三つに絞られるということである。もつとも同誌は、(b)について、「会議は、この闘争が階級的基礎(等しく国家的レベル、国際的レベルでの)にたつてなされるべきことを強調する必要があると感じた。……この点こそは、熱のこ

もつた討論・論争をまき起した唯一の論点であり、それがために多くの時間が費され、第一委員会の仕事を遅らせる結果を生じた。ある代表は、それがイデオロギー的な意味を含んでいるからということで《階級闘争》の概念に留保をつけるむね表明した」と述べている。[2] たしかに、パン・アフリカ会議のような大規模な会議は、「その深い歴史的、実存主義的統一性の背後に、黒人世界の現在の性向を反映した、統一性と同程度の現実面での多様性という側面をもつている」[3]（『プレザンス・アフリケーヌ』誌）のであり、そのために討議が容易にひとつの方向に収斂しない傾向が強いのであろう。

なおこの会議を取材したアルマ・ロビンソン（米国の黒人運動家・ジャーナリスト）によると、討議はあまり実質的ではなかつたようである。彼女はこういつている。「会議の最初の二日間は、手続き問題に終始した。つぎの四日間は、各代表が全議場にむかつて演説をする機会をえた。そして、パン・アフリカニズムの英雄たちをほめたたえ、南部アフリカの解放運動を鼓舞、激励し、パン・アフリカの哲学を称揚する言葉が、さながら小さな滝のようにほとばしり、会議が当面している実質的な諸問題は、その激流のなかで溺れてしまつた」[4]と。しかし、このロビンソンの論評が討議の雰囲気やその概要を客観的に伝えているかどうかは分らない。なぜなら、彼女は、米国黒人運動家の視点から、討議の模様を眺めたであろうからである。

ところで、第六回パン・アフリカ会議の特徴のひとつは、米国から多数のアフリカ系人が参加したことである。代表が何名でオブザーバーが何名かというその内訳は分らないが、米国からの参加者は約二〇〇人（総参加者数の四〇パーセント）にのぼつたということである。そのなかには、前述のようにこの会議の書記長に選出されたコートランド・コックスのほかイマム・アミリ・バラカ（本名ルロイ・ジョーンズ――前述のアフリカ系人民会議でプログラム・チェアマンを務めた）、オウス・サドウカイ（本名ハワード・フラー――マルコムX解放大学総長、アフリカ解放支援委員会委員）、リローン・ベネット（米国の黒人誌『エボニイ』の編集者、マルコムXの伝記の著者でもある）、等の有力なブラック・パワー的活動家も含まれていた。『アフリカ・リサーチ・ブレティン』誌の伝えるところによれば、これらの米国黒人運動家はいずれも会議の主要演説者として注目を集めたが、その演説の主旨はつぎのごとくであつた。すなわち、ベネットの場合は、「全世界の黒人が威信をとりもどすためには、アフリカの全面解放が必要不可欠である」と主張し、さらにアフリカの被抑圧民族の闘争を白人からの圧迫と闘つている米国黒人の闘争と等置し、「アフリカを搾取する政策をとつているあらゆる国に対して、米国の黒人は反対する」ことを明言した。サドウカイは、「米国における黒人の窮状は、資本主義の破壊と社会主義の建設によつてはじめて解決される。資本主義諸国からの商品をボイコットし、人種主義政権と貿易をおこなつている企業を暴露することによつて闘争を支持するようアフリカ諸政府に呼びかけるものである」と訴えた。またバラカも、社会主義的志向性をはつきりとうちだし、「闘争をさらに前進させることによつて実現する社会主義革命の枠内にしか、真のパン・アフリカ文化は存在しえない」と断じた。[5] しかし、こうした米国

黒人運動家の演説から、第六回パン・アフリカ会議が革命的雰囲気に支配されたと判断するのは誤りであろう。実際には、これらの「革命的」参加者はパーセンテージのうえでむしろ少なかつたようである。むろん、「革命的」参加者の範疇に類別されるものとしては、前記の黒人運動家のほかに、マルセリーノ・ドス・サントス（モザンビーク解放戦線副議長）、ハーバート・チテポ（ジンバブウェ・アフリカ人民族同盟議長――その後一九七五年三月十八日、ルサカで暗殺された）等、アフリカ未解放地域の八つの解放組織の代表の名を挙げることができるし、またカリブ海指導委員会の代表もそのなかにくわえることができよう。しかし、なんといつても、多数を占めたのはアフリカ諸国やカリブ海諸国の政府代表団であり、したがつてむしろ会議は、とかく保守的になりがちなこれら政府代表団の態度を、より強く反映したように思われる。こうした推測は、アルマ・ロビンソンの報告のなかのつぎの一節をあわせ考えれば、首肯するにたるであろう。曰く、

「タンザニアのジュリアス・ニエレレ大統領は、記者会見の席で不満の色をかくさないアメリカ人に、すべて政府というものは保守的なものであり、いかなる政府の組織もある制約をもつであろう、という古い政治的諺を思いださせた。

《アフリカ人はそれぞれ政府を代表しているために、決定をすることに非常に臆病になつているのです。われわれが会議を開いたときは、われわれは最少限の合意をするだけです。われわれが最大限の合意をしたことはいまだかつてありません》とニエレレは述べ、ＯＡＵはこれまで抜本的な変革への期待にほとんど応えたことがないむね説明した」[6]

このニエレレの談話は、会議の雰囲気についての前述の推測にひとつの根拠をあたえると同時に、ニエレレ自身のＯＡＵに対する不満をおしはかる材料にもなる。そして、こうしたニエレレのＯＡＵに対する不満こそが、かれをして今回のパン・アフリカ会議を主催せしめるにいたつた主要な動機のひとつであろうと考えられるのである。

この問題についていささか敷衍すれば以下のごとくである。すなわち、ニエレレは、一九五〇年代末期以降の、そしてとくにＯＡＵ創設（一九六三年五月）以降のアフリカにおけるパン・アフリカニズムの展開を余り評価していないのではなかろうか。なぜなら、この時期のパン・アフリカニズム運動は、独立期アフリカの統一的イデオロギー運動としていわば過度にアフリカナイズされ、欧米世界のアフリカ系人を切り離したかたちで、アフリカ的パロキアリズムともいうべき偏りをもちすぎてしまつた、ともいえるからである。しかも六〇年代初期の「独立の時代」がすぎ去ると、それは第五回パン・アフリカ会議（一九四五年十月）当時の革命的性格を喪失し、ＯＡＵといつた、独立アフリカ諸国政府の代表からなる、そしてその意味では多くの制約を背負つたルースな組織を、ほとんど唯一の場として展開されるかたちに固定化してしまつた。ニエレレ自身こうしたパン・

アフリカニズムの現状を批判的に見て、ふたたび一九四五年の第五回パン・アフリカ会議から出発し、米国やカリブ海のアフリカ系人の運動をふたたび戦線のなかに組み入れることによつてパン・アフリカニズムに非アフリカ大陸的側面を回復し、これを、革命的な性格をもつたインター・コンティネンタルなアフリカ人・アフリカ系人のイデオロギー運動として再編成しようと目指したのではなかろうか。もしそうだとすれば、第六回パン・アフリカ会議は、たしかにパン・アフリカニズムに新段階を画することになるであろう。

ただ、こうしたニエレレの姿勢（それはあくまでも推測にすぎないが）が、独立アフリカ諸国から支持されていたかどうかについては、否定的にならざるをえない。なぜなら、第六回パン・アフリカ会議に出席した独立アフリカ諸国の元首は（主催者であるニエレレを別とすれば）一人もいなかつたからである。アフリカで初めて開催されたパン・アフリカ会議に、アフリカ諸国の元首が一人として姿を見せなかつたというこの事実は、まことに皮肉な現象であると同時に、新段階を迎えたかに思われるパン・アフリカニズムの将来がかならずしも明るいとはいいきれないという感じを、われわれにいだかせる原因ともなつているのである。

（1）S.K.B. Asante, "Sixth Pan-African Congress : Re-Birth of Pan-Africanism," *Africa* No. 37 (September 1974), p. 29. もつとも*Africa Research Bulletin* Vol. 11, No. 6 (July 15, 1974) によれば、参加国は二九カ国であるが、これはおそらく正式の政府代表を送つた国だけを算えたのであろう（p. 3261）。

（2）"The Sixth Pan-African Congress," *Présence Africaine* No. 91 (3e Trimestre 1974), p. 178.

（3）*Ibid.*, p. 179.

（4）Alma Robinson, "Sixth Pan- African Congress : Africa and Afro-Americans," *Africa Report*, Vol. 20, No. 5 (September-October 1974), p. 10.

（5）*Africa Research Bulletin* Vol. 11, No. 6, p. 3262.

（6）Robinson *op. cit.*, p. 8.

二、第六回パン・アフリカ会議における ニエレレ大統領の開会演説

議長、閣下、そして諸兄姉

タンザニアの人民に代つて、わたくしは、今回のパン・アフリカ会議に参会したすべての人びとを歓迎する。われわれタンザニア人は、かくも多くの国、世界のかくも多くの地域からの代表を迎えてホストの役を務める義務と責任をもつことを、名誉に思うものである。われわれは、賓客――代表として出席している人であれ、オブザーバーとして出席している人であれ――の一人一人が、この国でくつろいだ気持になつてくださるよう望むものである。われわれはまた、われわれ全員の共同作業によつて、この会議をして、人間解放運動に奉仕せしめうるよう希望する。

この活動をおこなうにあたつて、われわれは他の人びと、と

くに過去のパン・アフリカ会議の指導者や参加者が作りあげた基礎に依存することになるであろう。過去七四年におよぶこの活動にたずさわつた人びとの一覧表のなかには、パン・アフリカニズム史に残る多くの偉大な人びとの名前が含まれるであろうが、それでもかれらの名前を全部は挙げきれない。挙げうる名前は、ブッカー・T・ワシントン、マーカス・ガーヴィー、ウォレス・ジョンソン、ジョージ・パドモア、ラス・マコンネン、その他多数であろう。

しかしながら、ウイリアム・デュボイ博士がこの運動に対してなした特別の貢献に敬意をはらわないのは、誤りであろう。なぜならかれは、トリニダッドの弁護士H・シルヴェスター＝ウイリアムズが発起人となつて一九〇〇年にロンドンで開かれた、最初のパン・アフリカ会議に出席し、その後一九四五年の会議を含むすべてのパン・アフリカ会議を開催し指導する責任を、みずから負つたからである。すべてのアフリカ人およびすべてのアフリカ系人は、デュボイ博士に負うところきわめて大きい。かれは人民大衆の指導者ではけつしてなかつたし、またそうであると自称しもしなかつた。しかし、思想、知識、組織能力をもつた人間として、かれは、黒人人民が今世紀に記録した人間の尊厳を目指す前進のなかで、大きな役割をはたしたのである。われわれは、シャーリー・グラハム・デュボイ未亡人——彼女もまた独自にわれわれの運動に対して多大の貢献をなしたのであるが——がわれわれとともに今日この会議場に出席できないことを残念に思う。

われわれは、かつて一九四五年の会議に出席した多数の人びとを、この一九七四年会議に喜んで迎えることができる。しかし、第五回会議で東アフリカ問題の報告者を務めたジョモ・ケニヤッタ大統領が今日の討議に参加できなかつたのは、われわれ全員にとつて非常に残念なことである。われわれが親しくかれに敬意を表する機会をもてたら、どんなによかつたであろう。しかしそれは不可能であるから、本会議は、ケニアの情報相ロバート・マタノ氏を通じてケニヤッタ大統領に挨拶と感謝のメッセージを送ることを希望するものと、わたくしは考える。また、われわれの多くにとつて、故エンクルマ大統領は、一九四五年会議に対するその貢献と、それに続く年月にアフリカの解放に向けておこなつたその活動のゆえに、あたかもわれわれの眼前にいるかのようにわれわれの胸のうちに生きていると、いわせていただきたい。

故エンクルマ大統領がガーナの独立以後アフリカのためにおこなつた数多くのことがらのうちのひとつは、もちろん一九五八年のアクラにおける全アフリカ人民機構会議の招集であつた。のちにチュニスやカイロでも会議を開いたこの機構は、完全な参加はアフリカの住民だけに限られはしたものの、それがヨーロッパ系やインド系のアフリカ人はもちろん北アフリカからの代表も含んでいたという点で、重要な会議であつた。かくてそれは、この大陸の地理的統一性を反映したものであつたの

である――その方式はまた、今回の会議への招請についても踏襲された。

しかし、過去の諸会議を成功させる原因をつくり、そしていたるところの自由と人間の平等を目指す勢力を鼓舞したのは、これらの会議以来国際的な名声をかちえた人びとだけだつたのではない。われわれは、その役割がいかに小さなものに見えようとも、アフリカの外で開かれた過去の会議で建設的な役割をはたしたすべての人びとに負うている。さらにそれ以上にわれわれが負うところ大であつたのは、自国あるいはその他の地域で、反植民地主義運動や反人種主義運動を展開することによつてこれらの諸会議のあとに続いた、すべての人びとであつた。

こうした恩恵の大きさは、その後継者であるわれわれによつて、過少評価されてはならない。なぜなら、過去のパン・アフリカ会議は、サハラ以南のあらゆる独立運動が立脚しうるような基盤をきずいたからである。しかもさらに重要なのは、黒人の男女によるこれらのパン・アフリカ会議が、アフリカ統一機構（ＯＡＵ）の基礎をきずいたことである。統一の教訓を最初に学び、実践し、そして教えたのは、実にこれらの人びとであつた。アフリカの人民はその教訓を吸収した。ＯＡＵはその成果のひとつである。そして、ＯＡＵは黒人の機構ではない。それは、あらゆる皮膚の色をした人びとを包摂する機構である。

こうした発展は強調する価値がある。なぜならそれは、人間の解放闘争の基本的統一を反映しているからである。パン・アフリカ会議の運動は、黒人男女の自由と正義を推進するために形成されたものである。それは、植民地主義、抑圧、人種主義からのアフリカの解放に向けて活動せよという要求の論理に導かれていた。そのことが今度はまた、アフリカの統一、北アフリカやその他の非黒人アフリカ人を含めたアフリカの統一を要求した。そこで独立アフリカ諸国は一九六三年にＯＡＵを創設したのであるが、その結果として今回のパン・アフリカ会議は、非黒人の参加者をもつにいたり、また、会議自体が、あらゆる人間、あらゆる皮膚の色をした人間に対して向けられている抑圧に、取り組まねばならなくなつているのである。

しかし、今回の会議が過去のパン・アフリカ会議と異つているのは、ただ単に参加している代表たちが以前より地理的に広い範囲にわたつている点だけにあるのではない。過去の会議はアフリカ以外の地で開催されねばならなかつた。なぜなら、一九五七年にいたるまでのあいだ、この大陸には、支配者も被支配者もともに黒人であるような国は僅か二つしかなかつたからであり、しかもこの二ヵ国はいずれも――同様にカリブ海にただひとつあつた黒人の支配する主権国家も――黒人の解放運動に対して積極的な指導をおこなう立場にはなかつたからである。

かくて、アフリカおよびアフリカ人のための正義の要求は、ヨーロッパで開かれた諸会議で表明されざるをえなかつた。しかし、そうした正義の要求が常に表明されたことは、注目にあた

いする。こうした要求の調子は年とともに変つたが、しかし、要求そのものは一貫していた。一九〇〇年のパン・アフリカ会議が南アフリカおよびローデシアのアフリカ人の取あつかいに抗議する覚え書をイギリスのヴィクトリア女王に提出したことは、その実例として、およびまだ為すべく残されている活動がなんであるかを示すものとして、想起されねばならない。一九四五年までに、第五回パン・アフリカ会議は同様の関心を、より率直に表明するようになつた。というのは、第五回会議は閉会するにあたつて、「われわれは、必然的な世界の統一と連合に従つて諸集団・諸人民が自らを支配することが、このひとつの世界で可能となるまでの期間にかぎつて、黒アフリカの自治と独立を要求する」と結んでいるからである。

いまやわれわれは、アフリカで会議を開くことが可能となつた。なぜなら、われわれは統一と連邦こそまだ達成していないが、一九四五年当時の要求のうち、少くとも独立という側面はわが大陸の大部分の地域で実現したからである。

そして、今回の会議と過去の会議の相違点の最後のものもまた、われわれの部分的な成功に由来する。過去五回の会議は、それに関心をもつ個々の人が推進し出席したからこそ開くことができた。もちろん参加者のなかには、労働組合や政治団体、社会団体の後援をえていた人たちが、若干いることはいた。しかし、苦しみにあえぎしかも意識に自覚めた者は常におなじ状況にある他人のために語ることができるという意味で、個人だけが代表たりえた、というのが当時の世界における黒人の地位であつた。男女を問わずこれらの人びとは、世界の支配的な政治的、経済的な力がかれらに押しつけた、ほとんど人間以下の地位を、抗議することなしにはもはや受けいれられなかつたがゆえに行動したのである。今日われわれがここにいるのは、部分的にはかれらの活動のおかげであり、この会議に参加したこれだけ多くの代表が、自分たちの国の人民を代表できるのもそのためである。

ここに出席している大部分の代表は、アフリカ諸国・カリブ海諸国の人民政府によつて送られたのであるが、かれらを送りだした諸政府は、かつてパン・アフリカ会議運動の基礎をきずいた人びとのような個人個人の初期的な活動があつたればこそ、いま存在しているのである。その他のアフリカ代表は解放運動を代表する人びとであるが、かれらへの信任状は、人民の支持をもたない闘争が急速に消滅する運命にあるという事実によつて、正当であることが証明されている。さらに加えて、ここには国民のなかでアフリカ系人民が少数者であるような諸国の、人民組織の代表も出席している。

関心を抱いている個人や集団がパン・アフリカ会議に参加することの重要性は昔もいまも変らないとわたくしが確信していることを、いまここで明らかにさせていただきたい。というのは、すでに充分過ぎるほど明らかであるように、アフリカやカリブの諸政府は、他の諸政府同様天使はかりで構成されている

わけではないからである。たしかに独立アフリカは、パン・アフリカ会議が過去において非難したような抑圧や不公正から解放されたとはまだいえない状況にある。したがつて、われわれ諸政府やわれわれ人民はすべて、広く人権や人間正義一般に関心をもち、かつ責任と同調心をあわせもつた個人や集団の論評に耳を傾ければ、益するところがあろう。今回の会議は、特定の政府を攻撃するための議場ではない。しかし、もしこの会議が、正義は古い諸国と同時に新興独立諸国においてもおこなわれるべしという要求の必要性を認めなかつたならば、それは義務を怠つたことになろう。

今回の会議の構成に関するこれらの事実は、会議への参加が地理的な要素にもとづくものではなく、また政府的な権力を現在すでにかち取つているとか将来かち取る可能性があるとかいつたことや、国際的な経済的結びつきなどに基礎をおいているのでもない、ということを意味している。われわれがここにいるのは政治的イデオロギーの問題ですらない。ここにいるすべての人が、そしてまた代表を送つたすべての政府や組織が、いまやその言葉がもつにいたつたきわめて曖昧な意味においてさえ「社会主義者」と呼ばれて、よろこぶとはかぎらないであろう。それでは、われわれをたがいに結びつけ、この会議を開かせるにいたつたものは、いつたいなんであろうか？わたくしがすでに明らかにしたように――そうであつて欲しいのだが――、この設問に対する答えは歴史のなかに、それも現在にいたるまでの歴史的遺産のなかにある。しかしわれわれにとつて重要なのは、過去のパン・アフリカ会議が貢献してきた解放の大義を今回の会議が絶対に覆えさないようにするために、この答えが含んでいるあらゆる意味内容を、理解することである。

というのは、初期のパン・アフリカ会議の構成は、共通の苦しみに一致して対応しようという人びとの要求によつて決定されていたからである。この運動のごく初期から今日にいたるまで、アフリカおよびアフリカ系人の男女は、ひとつの共通点、すなわち、かれらがアフリカ的な起源をもつているがゆえに課せられた、差別と侮蔑の経験をもつていた。かれらの皮膚の色は、かれらの貧困、侮蔑、抑圧のしるしともなり、原因ともなつたのである。

アメリカやヨーロッパの人民は、すでに一九〇〇年までには、発展した豊かな国の市民となつた。しかしアフリカ人を祖先にもつ人びとは、こうした発展や豊かさを平等に分かちもつことを許されなかつた。かれらは過去においても、これらの国ぐにに住むほかの移住民と同様に、アメリカ人、西インド人であつたし、いまでもそうである。かれらの祖先が昔奴隷としてこれらの国に連れてこられたという事実も、それを変えるものではなかつた。まさに、かれらの父祖伝来の言語、文化、慣習が奴隷制度の行為によつてかれらの遺産から切り離されていたために、かれらにとつて国籍がいつそう重要なものとなつたのである。しかしそれにもかかわらず、アフリカが引きつづき技術

的、政治的に後進的であつたことが、かれらの自信を失わせる心理的武器として利用された。そして、かれらの受け継いだ皮膚の色が、隔離された不平等な取扱いをかれらに押しつける手段となり、そのためにかれらは辛酸をなめたのである。

かれらのうちのある者は、皮膚の色の周囲を取りかこむ教育上の障壁を打ち破り、自分自身の置かれた地位や、仲間のそれを分析できるようになつた。かくてかれらは、自分たちがアメリカ人や西インド人であるにもかかわらず、尊厳と平等への自分たちの要求は、他の大陸の人民の地位と密接な関係があることを知るにいたつた。言葉をかえれば、かれら自身の経験がかれらを国際主義者たらしめ、世界の他地域にいる人びとの状況に関心を抱かしめたのである。

しかし、かれらの仲間の国民がかれらをそこへ結びつけようとしてやまなかつた当のアフリカは、近代においては、平等を主張したいと願う人びとの誇りを鼓吹するような大陸ではなかつた。アフリカ国民は、技術的に優越した勢力に対する自由の闘いに敗れ去り、さまざまなかたちの植民地支配のもとで生活していたのである。かれらの文化や生活様式は嘲笑され、愚弄され、かれらの技術的後進性はそのまま残された。かれらは、自分たちの父祖の地で、政治的、経済的に劣等者として生きた。自由を求める力は、うち続く敗北のために、ほとんどいたるところで混乱し、苦悩に見舞われたように思われる——というよりも実際にそうだつたのだ。ほんのわずかの地域で、組織や個人が、アフリカを支配するアフリカ人としての自分たちの権利を、なお公然と活溌に主張していただけであつた。

過去のパン、アフリカ会議は、かくて、アフリカ系人民およびアフリカ人民による、すべての黒人の人権と尊厳を宣言することによつてのみかれらはみな人間性を守ることができるのだという認識の、表われだつたのである。かれらはみな、黒いということやアフリカ人を祖先にもつていることを、世界のあらゆる地域で社会的、経済的、政治的不利益たらしめるような政策や態度と、闘わねばならなかつた。またかれらはみな、アフリカ人民が住んでいる諸国の自由のためにも、闘わねばならなかつた。かくて、皮膚の色は、もしそれがなければ国籍、政治的信条、宗教、文化などの違いによつて分断されてしまうであろう諸人民の、結合的要素となつたのである。

パン・アフリカ運動は、人種主義に対する反作用として生れた。そして人種主義は、いまなお存在している。人種主義が完全に敗北した例はどこにもなかつた。それはいまやアフリカの広大な地域で国家の哲学として闡明され、人口の多数を占める黒人に対して、無慈悲に押しつけられている。パン・アフリカ会議の誕生を要求したような害悪は、いまだにこの種の会議を見当違いのものとするにいたつていないのである。

この点をはつきりさせようではないか。われわれは人種的な考え方に反対する。しかし黒人人民がどこかでその皮膚の色のために引き続き抑圧されているかぎり、過去にそうしたと同

様、将来も、黒人人民はそうした抑圧に反対するために一致して立つであろう。そしてかれらがそうするとき、かれらは善意をもつすべての人びとの支援を必要とするであろう。そして過去の経験は、むろんこの会議の構成を見ても分かることだが、かれらがそうした支援を受けいれるであろうことを示している。

というのは、この会議運動は過去において、人種主義によつてその必要性を認識され、また会議そのものはもともと黒人に限定されてはいたが、尊厳を求めるわれわれ固有の闘争は常に、人間の解放を目指す世界的規模の闘争の一側面をなすものであつたからである。しかも、黒人でない多くの男女が、黒人たちとまつたくおなじように、積極的にこの闘争に参加している。この会議に出席している多くの人たちは、さまざまな皮膚の色とさまざまな祖先をもつ人民を含み、かつそれらの人民に支持される独立諸政府によつて、送られた人たちである。この事実は、これまで反人種主義闘争においておさめた部分的な成功の一事例であると同時に、その尺度でもある。われわれはいま、こうした発展を危くしないようにしなければならない。

なぜなら、もしわれわれが自分たちを、人類の残余の人たちと異つた存在とみなすことによつて、黒人としての自己の立場を引き続き擁護すべしという方向に立ちもどるならば、われわれはみずからを弱体化させることになるであろうし、世界の人種主義者たちは大勝利をおさめることになるであろうからである。人間の平等を目指す闘争は、いまや世界的規模で展開されている。抑圧はかならずしも皮膚の色に基くものではない。強制された社会的不平等の恥辱は、皮膚の色が黒いという理由だけで人びとに加えられているわけではない。

自分たちがそれに苦しんでいたがゆえに抑圧に反対することを学んだわれわれは、みずからの権利のために一致団結して闘つている他の人びとに対して、全面的支持をあたえることを期待——まさしく期待——されるであろう。われわれはこれまで支援を求めてきた。われわれは支援をあたえる用意がなければならない。

われわれの歴史は他の人びとを援けるわれわれの能力が実際面ではかぎられていることを示している。しかし、おなじその歴史が、世界のどこにおいてであろうと被抑圧者の叫びがあがれば、われわれは積極的にそれに応えねばならないことを示してもいるのである。

そしてとくにわれわれは、自分たち自身を、また自分たちがなしとげた前進を自分たちがいかに利用しているかを、検討する義務を有している。黒人人民が自治を達成したいまも、人種主義者たちはその敵意を棄てようとはしない。かれら人種主義者たちは、自己の目的のために、黒人支配諸国における不公正を、性急に攻撃する。しかし、こうした事実は不公正の弁明にはならない、それはかれらをいつそう困惑させるだけである。抑圧と闘つている黒人人民は、われわれの過去の闘争から恩恵

を受けた人びとによつて抑圧がおこなわれている場合には、そうした抑圧と闘ういつそう大きな責任すら担つているのである。われわれは自分たち自身を、自分たちの政府を、自分たちが果した発展を、注意して見なければならない。われわれは、黒人人民が自治をおこなつているいずれの国においても、かれらがはたして公正な社会を建設するべく鋭意努力しているかどうかを、われわれ自身に問わなければならない。もしそうでない事例があつたならば、われわれはただ坐したままでいて、他人が人種主義や抑圧を押しつけてきたときにそれと闘うための支援を求め続けることなど、いつたいできるであろうか。

したがつてわたくしの意見では、この会議の目的は、あらゆる地域の人種主義、植民地主義、抑圧、搾取に反対する手段を討議し、さらにいつそう前進することである。われわれの討議は、過去および現在におけるわれわれ自身の経験に、特別の注意をはらいつつおこなわれるであろう。しかし同時にわれわれの討議は、人間の平等と民族自決を目指す世界的規模の運動の文脈のなかでおこなわれねばならない。

というのは、まだ為すべく残されていることがありはするものの、植民地主義、人種主義に対するわれわれの闘争は、一九四五年以来いちじるしく進展したからである。政治的独立は、アフリカおよびカリブ海の広大な地域で、事実となつている。植民地主義はすでに死出の旅路をたどり歴史の博物館へと入つていき始めた。しかしながらいまわれわれは、植民地主義の終焉は、たとえ皮膚の色だけに基く抑圧の終焉を意味するとしても、人間の抑圧の終焉そのものではないことを、認識しなければならない。そしていまこそわれわれは、それが他の黒人男女に向けられたものであれ他の人種に属する人びとに向けられたものであれ、最近自由を獲得した国々の指導者たちがおこなつている抑圧に対して、闘わねばならないのである。

最近の二九年間は、人権運動が大発展をとげた年月であつた。人びとはいまや人種主義を意識するようになつている。人種主義はもはや理の当然のことがらとして是認されてはいない。まさに最近の論争の激しさそのものが、われわれのなしとげた発展を示している。なぜなら、すでに闘争がくり広げられているからである。犠牲者たちはもはやみずから低い地位にとどめ置かれるのを黙諾しはしないし、多くの人びとはもはや、皮膚の色が違うという理由で他人を侮蔑することに進んで同調しはしない。

経済的な問題については、われわれの発展ははるかに緩慢である。黒人人民が多くの国ぐにで支配的な資本主義制度のなかに組み込まれていることは事実である。かれらはもはや、かならずしも皮膚の色のために排除されてはいない。そしてアフリカやカリブ海では、黒人はいまやあらゆる節囲の職を占めている。かれらはもはや、低賃金労働や低賃金事務の仕事だけに閉じ込められてはいないのである。

しかしながら、一国内部においても、世界全体として見た場

合でも、黒い肌をしている者が経済的に不利だということもまた事実である。所得の平均的水準は、そしてまた雇傭の平均的水準も、合衆国、カナダ、ヨーロッパでは非黒人市民より黒人市民の方が低い。勤労者として受け入れられるため、また勤労者として評価されるための闘ずは、続けられねばならない。また世界中の黒人国家が、すべて世界の貧困な諸国のなかに数えられることも事実である。もつとも貧困な二五ヵ国のうちの一六ヵ国が、アフリカの国なのである。

しかしながら、経済関係における真の問題は皮膚の色ではない。一国内部においてもまた国家間においても、問題は基本的には、搾取体制から生ずる抑圧の問題なのである。われわれが貧困であつたり、貧困なままにとどめおかれたりしているのは、われわれが黒人だからではない。われわれが依然として貧困であるのは、世界貿易・通貨制度のゆえである――そしてこれらの制度は、ほかの欠点はいざしらず、皮膚の色による区別には関係がないのである。これらの制度は第三世界全体に不利な影響をあたえている。このことは、自分たちの抱えている経済問題を克服するためにアフリカは、大陸内で統一行動をとらねばならないということ、および世界中の貧困な諸国と協力しなければならないということ、を意味している。パン・アフリカニズムは、この大陸の人民をして統一を目指す活動へ向わしめるとき、重要性を発揮する。しかし、もしそれがブラック・アフリカとアラブ・アフリカの分裂を結果として招来するなら、パン・アフリカニズムは害悪となろう。またもしそれがアフリカやカリブをして残余の第三世界から孤立する方向へ向わしめるならば、あるいは、もしそれが第三世界に属する他の諸地域をして、アフリカやカリブ地域を孤立させる行動をとらしめる原因となるならば、パン・アフリカニズムは、人間の解放に対して大きな害をなすことになろう。

これらのことがいま確かめられつつある。アフリカおよびカリブ地域の内部において、諸国間の経済協力はある程度の発展をとげたし、その目的のための活動は続いている。同時に、第三世界諸国のより広範なグループが、たとえば国連貿易開発会議において、また欧洲経済共同体との交渉において、さらにその他の必要な中心的舞台において、特別なかたちで協力的に活動している。かくて、この領域においてさえも、人間の平等と人間の尊厳のための闘争は続いており、かつ発展の最初のしるしを示し始めているのである。

言葉をかえていえば、われわれはあらゆる方面で進歩をとげている。しかしそのことは、いつそうの努力を刺激するものでなければならない。それによつてわれわれが満足してしまつてはならないのである。なぜなら、今後克服さるべき障害はもつとも困難なものだからであり、もしわれわれが前進し続けなければ、人間の自由と平等を目指す運動全体がふたたび押しもどされてしまうであろうからである。われわれが達成したものは、いちじるしく不充分だというだけではない。それは人種主

義があらゆるところで克服され、不公正があらゆる側面で挑戦されないかぎり、しつかりとこの手に握ることができないのである。

南アフリカ、ナミビア、ローデシア、アンゴラ、モザンビーク、ギニア・ビサウ、スペイン領サハラ、アファル・イサ、これらの国ぐにはすべて、自由の運動のなかで今後かちとられねばならない。

数週間前までは、少くともこれらのうちの最初の六ヵ国は、自由の戦士たちが強力かつ無慈悲な敵を相手に一寸きざみの前進を続けている状態であつたので、これをかちとるためには今後なお数年にわたる激しい流血の闘いを強いられるものと予測する必要があつた。

その予測はいまでもなおただしいかもしれない。しかしポルトガルにクーデターが起つていらい、ギニア・ビサウ、モザンビーク、アンゴラに新たな可能性が生れた。これらの地域では、いまや人民にとつて、過去一〇年間おこなわれてきた解放戦争をもはや続けることなしに、独立を達成することが可能であるかもしれないのである。いまの時点では、断言することはできない。しかし、確信できるような確実なことがらも、あるのである。

ちようどアフリカがポルトガル植民地の平和を欲しているように、解放運動は平和を欲している。われわれが要求している自由、そのためにはわれわれは引き続き平和を犠牲にする——もし必要なら——こともあえて辞さないところの自由とともに、平和を達成することがいまこそ可能であるよう、われわれは望むものである。そして解放運動はこのような闘争の新しい段階に突入する一方、それはこのパン・アフリカ会議の全面的支持を必要としている。解放運動は過去の闘争においてたじろいだことはなかつた。そしていまもひるまないであろう。しかし、これらの解放運動とそれに参加している人民のみが、つぎの段階に進むべきときを判断する資格をもつのであつて、それはかれらこそが現代の戦争の苦しみにたえてきたからであり、かれらこそが、もしその軍事的闘争がまだ続けられるべきだとすれば、その苦しみにたえる当事者だからなのである。もしもここダレスサラームに集まつているわれわれの言葉がかれらの任務をより困難なものにするなら、われわれはたいへんなことをしでかしたことになろう。

しかしポルトガル植民地に関してなにが起ろうと、ローデシア、ナミビア、南アフリカにおける自由の戦いは続くであろう。アフリカおよびカリブ海の自由諸国は、たとえそうしたいと思つたときですらも、自由の戦いをやめることは許されないであろう。

なぜなら、この大陸および世界の将来にとつて基本的なひとつの事実があるからである。すなわち人間性は不可分だというのがそれである。人は、もし皮膚の色や人種を理由に人間を侮蔑することに同意するなら、自尊心をもつて生きることはでき

ないし、また他人の尊敬を受けるにも値しないであろう。このことは白人が、非白人を抑圧している南部アフリカにおいても真実である。このことはまた、非白人が権力を握つている残余のアフリカおよびカリブ海地域においても真実である。なんびとがそれを課そうとも、犠牲者の数がいかに大きくまたいかに小さかろうと、またそれを促進する恐怖や復讐心がいかに理解できるものであろうと、人種差別は戦争や苦痛の母であり、あらゆる人間にとつて自由の喪失である。なぜなら、たとえ人間が人間として生きることができなくとも、その人間は少くとも人間として死ぬであろうからである。

議長。今回の会議は、黒人であるがゆえにそしてアフリカ人の祖先をもつがゆえに苦しんできた、あるいは苦しみつつある人びとの解放に影響をよおぼすような問題を、討議するであろう。しかし人間は他人を奴隷化することによつて自由になることはできない。それゆえ会議は、人類の解放に影響をおよぼすような問題を討議するであろう。

このことは、会議の日程に、地球上の大部分の地域における抑圧と搾取をあつかう項目が多く組まれることを意味している。しかしこの会議はアフリカ統一機構の会議でもなければ非同盟会議でもなく、また七七ヵ国グループの集会でもない。さらに、われわれがそれらの会議やグループでもあるかのように行動するのは、重大な誤りであろう。そのように行動するのではなくて、われわれは、集団の一員としてまた個人として、われわれがどこに生活していようと、われわれの宗教や政治的信条がなんであろうと、われわれの国籍がどこであろうと、われわれが積極的貢献をなしうるような問題に専心とり組みたいと思う。なぜなら、われわれはその生れと歴史とによつてアフリカに結びつけられているだけにとどまらないからである。われわれは同時にまたそれぞれの国の市民であり、またキリスト教徒であつたり回教徒であつたり、社会主義者であつたり保守主義者であつたり、資本主義者であつたり共産主義者であつたりするからである。しかもこれらの違いは、われわれの皮膚の色や祖先の問題よりもわれわれ自身を反映している面が強い。われわれが受け継いだものは、たとえ変えようと望んでも変えられない。しかしまえに述べた違いは、選択と決定の問題なのであり、したがつて個人としてのわれわれの真の姿を反映しているのである。われわれの血統とは無関係の集団のなかで、正義の運動に対する責任をはたすその方法によつてこそ、われわれは今回のパン・アフリカ会議の実践的な意味を示すことになるであろう。

というのは、きわめて重要なことがひとつあるからである。すなわち、もし今回の会議がアフリカの解放運動に対する支援の宣言をおこなうなら、それらの宣言は、きたるべき年月において実際行動をとることによつて支えられねばならない、闘争が続くかぎり、言葉は政治的、物質的支援に裏打ちされねばならないのである。

そしてもしこの会議が、いま非常に多くの人びとが苦しんでいる経済的不公正を克服するために、第三世界の統一の必要性を認めるなら、それにもまたその目的へ向けての活動がともなわねばならない。おなじことは人種主義を終らせるべしという要求についてもいえる。その要求にはあらゆる種類の、あらゆる場所での人種主義に反対する、個人および集団の活動がともなわねばならないのである。

われわれの任務は明らかである。われわれは世界市民として人類の発展に十全なる役割をはたさねばならない。そうするためには、われわれは、自分たち自身に対する植民地主義や差別の精神的影響を払いのけねばならない。われわれはあらゆるところで、皮膚の色に対する偏見や差別と戦わねばならない。そしてわれわれは、世界の資源の平等な配分を受ける、世界の全市民の権利を、確言――そしてそれが可能な場合には推進――しなければならないのである。

諸兄姉よ。タンザニアの人民は、今回の会議がこれらの諸目的に貢献するであろうことを希望する。それゆえにわれわれは、諸氏の討議が大いなる成功をおさめるよう望むものである。